

---

# 幽霊は恋をする

片倉 綾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊は恋をする

### 【Nコード】

N9505C

### 【作者名】

片倉 綾

### 【あらすじ】

わがまま(?) 仙女と気弱な僕(幽霊)のハチャメチャ珍道中。お金はないけど時間はある。大切なもののため今、旅に出る。

## 第一節 第一話

守りたいものなんてなかった。だって、守られるのが、当たり前だったから。

守りたいものがあつた。守れると思つてた。でも、それは、傲慢な幻想でしかなかった。

\*\*\*\*\*

何度か目をしばたかせてから辺りを見回すと、そこはちよつと古臭い感じがする、それでいてこざつぱりしている床の上だった。ああ、昨日やつと久しぶりに宿屋に泊まれたんだっけ、とひとりごちてから身を起こすと、飾り窓から朝の光が優しく射し込んでいるのが目に入った。その光を見ると、なんだかわからないけれど、祝福されている気分になる。うん、きっと今日はいいい日になるに違いない。と思つたその矢先。

「あら。今頃起きたの？ あんた、幽霊のくせに夜に眠るなんて、職務怠慢で訴えられるわよ。」

一人の少女が部屋に入ってきた。どうやら彼女はだいぶ前に目が覚めて朝の散策に出かけていたらしい。服の前をそつと掴んでできた

たわみの中に、瑞々しい、きらきら光る木苺が見て取れた。

「おはようございます。今日はいいいお天気みたいですね。」

気分のいい朝の目覚めを迎えられた僕はちよっぴり浮かれた笑顔で挨拶をした。すると彼女はそんな僕の顔をちろり、と見やってこう言い放った。

「はあ？ 確かにお日様は出てはいるけど、それがあたしにとって『いい天気』かどうかなんて、あんたにはわかんないでしょ？ 世間一般に言われてる『晴天』をもって『いい天気』なんていうのをあたしに当てはめて考えないでちょうだい。」

前言撤回。

いい日になんてなるわけないんだ。彼女と一緒にいるのに、「いい日」になるわけがないんだもの。

僕との会話を終わらせた彼女はその物言いとはうって変わって優しい手つきで木苺を円卓に載せていく。ひとつ、ひとつ。丁寧に。それはそれは愛おしそうに、きらきらと黄色く輝く木苺を載せていく。その、優しい微笑を湛えながらも真剣に、そう、馬鹿みたいに真剣な瞳で木苺を円卓に載せている。

「華霄。」

ふと、静かに彼女を呼ぶ声。眼をやると入り口に気配もなくたたずむ青年がいた。彼女の付き人の伯陽だ。彼もやはり早く起きて散歩に行っていたらしい。朝露の中を歩いたのか、足元がちよっぴり濡れている。

「あら、伯陽。おはよう。あなたも散歩に行ってたの？」

伯陽は静かにうなずくと、華霄に近づき手元をみた。彼はあまり話をしない。話したとしても、一言一言だけ静かに言葉をつむぐくらいだ。

今日はね、木苺を見つけたの。だから、採ってきちゃった。おいしそうでしょ？彼女が楽しそうに彼に話しかけている。笑顔の華霄に比べ、ちよつと表情の乏しい伯陽はただ黙って話を聞いている。彼は表情は乏しいが、その眼はいつも優しい。まるでこんなと湧き出る泉のように澄んでいる眼だ、と彼女たちと出会った当初に言ったことがある。その時も伯陽は黙ってわずかに首をかしげ、華霄はいたずらっぽい眼で、ふふつと軽やかに笑っていた。今でもよく覚えている、その時の華霄の表情。ゆつくりと瞬きをして、その黒曜石のような瞳をきらきらさせながら、僕の眼を見てこう言っただ。

優しく、とても優しく                      あなた、私といらっしゃい                      。

\*\*\*\*\*

そのとき、「僕」は「僕」ではなかった。「僕」は存在しなかった。あるのはぼんやりとした闇。いや、闇だと、はっきり断言す

ることもできない。だって、その時、「僕」は存在していなかったのだから。「僕」は存在しなかったが、それでも存在するものもあった。それは何か。「僕ではないもの」だ。

「それ」はまだ「僕」ではなかった。「僕」が「僕」になるにはまだまだ時間が必要だったのかもしれないし、必要でなかったのかもしれない。それは「僕」にはわからない。だって「僕」ではなかったのだから。

「そこ」に時間があったのか、なかったのか。空間があったのか、なかったのか。それもわからない。ただわかることは「僕」は「僕」ではないものから生まれた、ということだ。

ある日、と言うと語弊がある。先ほども述べたように「そこ」には時間があったかもしれないし、なかったかもしれないから。ただ「僕ではないもの」に変化が起こった。それは目に見える変化であったかもしれないし、そうではなかったかもしれない。ただ、「変化」があった。「僕」が「僕の存在」というものを認識したのだ。そして認識したことによって世界が、少なくとも「僕」の世界が変わった。「僕」が変化を望んでいたのか、望んでいなかったかなんてのは関係なく、世界は変わってしまった。

「僕ではないもの」が変化を生み、そして「僕」を生んだ。が、それはまだ「僕」になっていなかった。「僕」が「僕」を完全に「僕」と認識するまでにはまだ足りない「何か」があったからだ。ただ、それでも何故「僕」が「ああ、生まれた」と認識したかと言う

と、風を、光を、感じたからだ。それらは少なくとも今までいた「そこ」にはないものだった。それらを感じるとき、なんと表現すればよいのか初めはわからなかったが、後々考えるとやはり「生まれた」と言う表現がぴったりくるのではないかと思うので、今でもこの表現を使っているのだがもしかしたら適切ではないのかもしれない。

まあ、大体、自分が生を授かった瞬間のことを覚えてる人なんていないだろうから、まだぼんやり記憶がある分僕のほうが優秀だろう、と思うのはうぬばれだろうか。

こうして「不完全の僕」は毎日風を感じ、光を感じ、そして闇を感じた。いったいどの位の時間がたったのかなんて、僕にはわからない。ただ、風を感じ、光を感じ、闇を感じていたからだ。そうしていることが「不完全な僕」には「完全」に思えたし、これ以上の変化はないと思っていた。そして、僕は忘れていた。「変化」はひたひたと音を隠して近づいてきて、あつという間に僕を飲み込んでいくものだったと言うことを。

二番目の「変化」。それは「僕」を「僕」と認識させる、大きな「変化」となった。「不完全な僕」に突然近づいて来た「それ」に対し「不完全な僕」は、初め認識ができなかった。だって、「それ」は初めて見たものだったからだ。だから、なんと認識してよいのかわからなかった。ただ、それは「光」に似ていた。なので初めは「光」なのだと思った。が、「それ」は「不完全の僕」が知ってる「光」と少し違った。では、「光」でないのであればそれは何なのか  
もちろん、今の僕は知っているけれど 「不完全な僕」

は一生懸命考えた。それまで僕は毎日風を感じ、光を感じ、闇を感じていた。けれど、これらのものがなんと呼ばれているか知らなかった。だから知りたくなつたのだ。「『風』はなんと呼ばれている

ものなのか。「『光』はなんとよばれているものなのか。」など。  
つまり 僕は知らなかったのだ。『言葉』と言うものを。

『道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽。  
沖氣以為和。』

\*\*\*\*\*

その日、結局宿を出たのは、街がすっかり目を覚ましたきつた後で。僕はぶつぶつと文句を言う華霄に黙ってついていくしかなかったわけなんだけれども。ガヤガヤといろんな人の声が交じり合ってる市場やら、呼び込みの声が激しい食堂街を通ると、華霄のぶつぶつも少しずつ小さくなっていき、そのうち「あ」とか「ん？」とか、感嘆がもれ始める。こういうところは普通の女の子に見える。いや、女の子であることは間違いではないから、「見える」ってのは失礼かもしれない。

「…春、仲春！聞いているの？」

「え？」

「…聞いてなかったでしょう…。もう、失礼しちゃうわ！あたしはなしかけてあげてるってのに！」



ぷう、と顔を膨らませる様子はまるで幼子のようにだ。しかし、その表情も長くは続かない。すぐに新しいものに目をやっては興味深そうに瞳をきらきらさせるのだから。

「あのね、今日はどこまで行こうかって話しをしたの。もう一日この街にいてもいいし、別の街に移動してもいいかなって思ってるんだけど。伯陽は次の街に行くまでかなり距離があるから明日にしてもいいんじゃないかって。仲春はどうしたい？」

案の定、機嫌を直したらしい華霄が屋台を覗きながら話しかけてくる。見ているのは翠の石がついている髪飾り。きつと、挿したら似合うだろう。黙って笑ってさえいれば、の話だけど。そんな不埒なことを頭の片隅で考えながら、もう一方で近隣の街のことを考える。

「別の街ですか……。次の街、と言うと岱裕が近いって言うってたな……。でも、岱裕に行くとなると、この時間ではちよつと遅すぎるかもしれませんね。」

岱裕はこの近隣にある城壁に囲まれた立派な街で、東のほうでは五本の指に入るくらいの商都として栄えているらしい。なんでもその昔、都が置かれたこともあったと言ふことなのだけれど、僕自身はよく知らない。行ったことないし、この話だって、昨日の宿屋の宿泊客から教えてもらった情報だ。

「へえ、岱裕を知ってるなんてね。仲春、何時からそんなに物知りになったの？」

簪に向けていた瞳を僕のようによこす。僕はその、華霄が持っている簪の、翠の石の可憐に揺れるさまに一瞬、目を奪われた。

「昨日、宿屋で一緒に食事をした人がいたでしょう？あの人が言っていたんですよ。」

視線を簪に、いや正確には翠の石に向けながら、話す。      どうも、目が離せない。

「ああ、あの人の良さそげなおじさんね。確か商人だって言っていたけど。あの性格じゃ、もうからないんじゃないかしら・・・？いい人そうなんだけどね。      で・・・気に入ったのね？」

華霄が聞いてくる声が聞こえた。気に入った？何を？おじさんを？それとも      。

突然、手が伸びてくる。意識が簪からそれる。と、こわい笑顔の華霄の顔が見えた。

「人に話しかけると、話を聞くときは目を見なさいっていつてあるでしょ！？ばやばやせずにお財布を出して頂戴。」

「買うんですか？」

「あ・ん・た・が！！気に入ったんでしょう？だから買うのよ。」

「買ってくれるんですか？」

「まさか。ツケよ、ツケ。しっかり働きなさいよ、グータラ幽霊。」

そう言いながら、財布を出して、かんざし屋に御代を支払うべく話しかける。

暫くして。帰り際にひきつった笑顔で僕らを、正しくは値切りに値切った可憐な少女を見送った店主を見て、僕は思った。絶対華宵のほうがおじさんより商人に向いてるだろうな、と。

「はい、これね。あたしが挿してあげようか？」

しばらく道を歩き、簪屋が見えなくなつた頃に華宵がそう言つて僕に簪を差し出した。しばらく、簪をみつめて考える。

「あの。別に僕は自分に挿したくて見てたわけじゃないんですけど。」

「え？じゃあ、この簪どうするのよ！？」

きよとん、とした彼女の顔はこの女物の簪を挿すのは僕なのだ、と本気で思つてたことを物語つていて。僕はなんか、微妙な気分になる。

「僕が、こんな女物を挿せるわけがないじゃないですか。」

「だって、気に入つたんでしょ。だからわざわざ簪屋が見えなくなるまで渡すのをひかえてたんじゃない！！気を使ってあげたのに！！」

「いやいや、気を使うところがずれてます。明らかに。」

「だけど、とにかく！僕は挿しません。綺麗だつておもつたけど、自分で挿したいわけではありませんから。大体、女物の簪挿してる男なんて変に目立つし、華宵はそんな人間と一緒に歩きたいですか

？厭でしょう？だから、僕は挿しません。」

一気にまくし立てると、華霄がむっとした顔で聞き返してくる。

「じゃあ、これどうするのよ！」

「女物なんだし華霄が挿したらいいじゃないですか。似合うと思いますよ。」

「これを私に挿せって言うの？」

「ええ、そうです。僕が挿すよりも、絶対似合うと思いますよ。」

絶対、の部分に力を込めて言ったからなのか、華霄はふむ、と二つ頷いておもむろに簪を挿してこう言った。

「じゃあ、これは仲春からの贈り物ってことで貰ってあげるわ。でも、御代は仲春もちなんだから、ツケはツケよ。しっかり払ってもらいますから、そのつもりでいなさいよ。」

可憐な翠の石を揺らめかせてきっぱり言い放った彼女を見て僕は確信した。      やっぱり、昨日のおじさんより華霄のほうが商人に向いている。



## 第一話 第二節

さて、簪を買ってしまったが為にちよっぴり懷具合が寂しくなった我らが華霄隊。（なんて。そんな言い方をしたら絶対に華霄に怒られるけど。）こんなときにどうするかと言うと

「初にお目にかかります。私は白圭洞は延狼君に乙返しております華霄と申します。よろしくお見知りおきを。」

そう、大切なのは挨拶、そして人脈を広げることである。で、現在さらさらと言いなれた文句で挨拶をしているのが我ら華霄隊の隊長、華霄その人。この人、本当に愛想笑いが似合うんだ。で、誰に挨拶をしているかと言うとこの街にある廟の主である。だいたい、何処の街にもたくさんの廟があるが、やはりその中心的存在となるのが土地神様のいる廟だ。土地神様はその土地に縁のある人（稀に人でないこともあるけど）がなることが多いので情報をたくさんもっているし、何しろ顔が利くので、ここ最近、付近の街で困っている人はいないか、一体どんな悩みなのかを聞きに来ているのだ。

「ああ、そうかしこばらなくてよいよ。私はこの辺りの土地爺を任されている宋節という。まあ、生前の名など何の意味も持たないがね。」

目の前に立っているのは初老の男性だ。神様に年齢は関係ないのだから初老という言葉は正しくないのかもしれないけれど。黒髪の中混ざる白髪は少なくない。目元の皺は笑顔になると一層濃くなる。だから、やはり初老と言う言葉がぴったりだ。その彼に華霄は

ひと通りの挨拶の言葉を述べ、突然尋ねた無礼を詫び、少しの間話をした後、本題に移った。

「では、岱祐の街に？」

「ああ、何でもあちらの爺様も困っているらしい。あまり大仰に頼みに来るのでそろそろ何とかしてやらねばならんと思いつつも、その主の評判はあまりよくないのでな…。困つとるらしい。」

少し困った顔をして紡がれた言葉は、その実かなり困っていることをにおわせている。

「評判が悪いとは？」

華宵もつられて困った顔をして聞いている。やはり、助ける人の人間性というのも大切だ。悪人だからと言って絶対に助けないわけにもいかないし、善人だから何時でも助ける、というものでもないらしい。

「いや、そんなに酷い人でもないんだがね。何でも高利貸しで一代の財を築いたとかで…。まあ、少しばかり業突く張りだ、という程度かの。しかし、相談事はその主自身のことではなく主の娘のことらしい…。高利貸しで人には酷いことをしておつてもやはり自分の娘はかわいいらしい。娘自身は評判の良い子なんだがね…。」

ふう、と溜息をつきながら話す土地神様は先ほどよりも一層困った、と言った顔をしている。

評判のあまりよろしくない高利貸しに、親とは似ても似つかぬ評判の良い娘。まるで物語のような話だが、まあ、物語なん

てものは大体見たり聞いたりしたことがモトになつてることが多いのだから仕方ないのかもしれない。しかし、それだけだったら別に土地神様も困ることはないんじゃないか？娘を助ければ親も改心するかもしれないし、むしろこれは改心させる絶好の機会になるんじゃないか…？

そんな風に自分で勝手にいろいろ考えていた僕の耳に届いた言葉は、その場にいた全員を固まらせるに十分だった。

「しかしどうやら娘はな、  
幽霊に惚れとるらしいんじゃないよ。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9505c/>

---

幽霊は恋をする

2010年10月20日19時31分発行